

## 日米、史上最大規模の空挺作戦 *U.S-Japan conducts historic airborne operation*

March 15, 2021

By Staff Sgt. Gabrielle Spalding  
374th Airlift Wing Public Affairs

日本晴れの朝、フライラインには500人以上の陸上自衛隊員が言葉を交わしながら、空挺降下の手順を確認し、パラシュートバッグを背負う姿があった。その間、米空軍の空兵はかつてない規模のエアボーンを行うため、12機のC-130Jスーパーハーキュリーズの準備に取り掛かっていた。

日米のパートナーシップが歴史をつくる初日の駐機場は、軍人たちのエネルギー、興奮に満ち溢れていた。

3月9日から11日にかけて行われた演習「エアボーン21」で、第374空輸航空団は、陸上自衛隊第1空挺団を支援し、日米間による最大規模の落下傘投下および物量投下を行った。

今回の演習では、陸上自衛隊員を乗せたC-130Jが横田基地から出発し、キャンプ富士の降下帯で空中強襲を成功させ、その2日後には地上の陸上自衛隊に134個のコンテナ輸送システムの物資を投下した。

「この作戦の主な目的は、日本国内のあらゆる場所で陸上自衛隊が空挺を展開できることを実証することだ。学んだことを今後の訓練にどう活かせるかを知る絶好の訓練の機会であり、対等の敵対勢力への効果的な抑止力になる」と第36空輸中隊パイロットであり「エアボーン21」ミッション指揮官のクリストファー・エスピノサ少佐は述べた。

このような大規模な作戦は、総力で取り組まなければならず、多くの横田の空兵の支援と献身がなければ実現しなかった。

「第374整備群は、任務態勢を整えた航空機を最大限数提供すると同時に、地元での飛行を継続するため、サージの前の数週間、さまざまな整備の課題を克服するために数えきれないほどの時間を費やした」と第374航空機整備中隊運用責任官のデビッド・パーキンス少佐は述べた。

「横田基地のC-130Jの80%以上を稼働させるためには、何ヵ月にも渡って綿密に計画された航空機のロジスティックス、航空機駐機計画の立案と調整、そしてミッションを実現するために航空機形状の適切なリソースを調達することを必要とした。演習「エアボーン21」では、整備担当が12機のC-130Jを準備し、空軍力と他に類のない抑止力を実践するため、数日間に渡る二国間の空中投下に十分な調整を行い実現させた」とパーキンス氏は語る。

陸上自衛隊は、3日間にわたりコンテナ輸送システムの物資を第374装備即応中隊戦闘機動小隊ドックに運び、C-130に積み込む準備が整うままで保管した。

第374装備即応中隊CMFの監督官であるサミュエル・フレッチャー軍曹は、物資のデリバリーアークを高めるために、第730航空機動中隊がC-130への輸送に使用するフォークリフトを提供したと語った。バンドルのダウンロードとアップロードの際に行われた作業での誤作動はゼロだった。

整備士によって機体が整えられ、コンテナ輸送システムの物資の積込みが完了した後、第36空輸中隊のロードマスターは、空中投下為に物資を固定するための手順を確認した。

「どちらのミッションも航空機だけでなく、関係する人員にも高いリスクを伴うため、チェックリストに厳格に沿うことが非常に重要だ。



これにより、正確な投下および空挺隊員の安全を確保することができる」と第36空輸中隊ロードマスターのバーニー・バネット技能軍曹は語った。

エスピノザ少佐は、「第374空輸航空団の空兵は、機体の整備、物資の確認、搭載手順、500人以上の陸上自衛隊員の基地への誘導まで、あらゆる面で細部にまで気を配って協力し、この歴史的な作戦を成功させた」と振り返る。この作戦は、太平洋地域の安全保障を提供する我々の能力をさらに高めた。

「今回の演習は、我々の協力関係を向上させ、国と部隊間の絆を築いていく機会となった。今回の空輸は、これまでに見たことのないものだった。これまで学び、計画し、訓練してきたが、実際にあの規模で実践することはまたとない機会であり、その指揮官の一人に選ばれ、第1空挺団と協力できたことは素晴らしい経験だった」とエスピノザ少佐は加えた。